

# 福岡大学

## 学園通信

人と夢を紡ぐ  
コミュニケーションマガジン

October, 2012  
No. 39



「きわめる」

自分を深め、研ぎ澄ます。  
知性、感性が磨かれていく。  
個性がさらに輝いてくる。











### ラーニング・コモンズ 2F 3F 4F

学生同士がコミュニケーションを取り、共同で学ぶことができるオープンスペース。大学院生のLAにアドバイスを受けることもできます。

### MESSAGE

図書館スタッフと、今回の案内役・学生スタッフ2人からのメッセージです。



**学生スタッフ**  
法科大学院(法務研究生)  
大野 清子さん

初めて入ったときは「美術館みたいで、とてもきれい」と驚きました。検索システムや自動書庫、自動貸出機などの機能も充実していて、快適に読書や勉強ができそうです。



**学生スタッフ**  
法科大学院3年次生  
西村 亮輔さん

学生さんにも好評で、グループ学習室やAVコーナーなどを早くも使いこなしている様子なのでうれしいです。後期から大学院生のLAを配置するラーニング・コモンズは、学生と大学院生、教員も交えた交流の場になることを期待しています。さらに充実した図書館にするために、学生さんからの意見や提案もお待ちしています。

機能的で、開放的な雰囲気の中に、落ち着いた読書や勉強ができるスペースと、ディスカッションや仲間と共同で学習できるスペースがあるのが魅力。大いに活用してほしいです。

### PLUS NAVI

#### 電気自動車



中央図書館と分館・各分室間で資料の回送をする際に使われます。

愛称は、「ボボ力」です。

#### オブジェ



IFの壁面には五十嵐威暢氏の「知の大地」、吹き抜けには新宮晋氏の「光の森」といった世界的な著名アーティストによる作品も。

#### 太陽光発電表示パネル



環境に配慮した施設整備の一環として、屋上と7Fの光庭の壁面に太陽光発電装置を設置。発電量をエントランスのパネルで確認できます。



### グループ学習室

2F 3F 4F

図書館の資料やパソコンなどの持ち込みができ、3人から最大30人までのゼミ活動やグループによる共同研究・学習に利用できる個室。基本は予約制ですが、空いていればオープン利用も可能。「館内に仲間と共に学ぶ場があるのは便利ですね」。



読書や自習という「静」はもちろん、仲間と議論を交わしたり、グループによる共同学習やプレゼンテーションなど「動」の学びもできる空間へ。図書館が「アクティブラーニング」の拠点になります。

## 勉強する



### 情報サービス室

2F 3F 4F

パソコンやオンデマンドプリンタ、プロジェクターなどの設備を備えた部屋。主に図書館の情報資源を活用した講義・演習や図書館の利用説明会などに使われます。



#### 移動式書架 3F 4F

3F・4Fには多くの資料を省スペースで開架できる集密書架も。自分で本棚を移動させ、資料を探すことができます。



#### AVコーナー 2F

ビデオやDVDなどの視聴覚資料を自由に視聴できるコーナーには、一人用と三人用のブースがあります。「友人と一緒に鑑賞できるのがうれしいです」。



#### 自動書庫 地下

国内屈指の規模を誇る地下の自動書庫。現在約3万4,000個のコンテナに138万冊の資料が収納可能。貸出・閲覧を申し込むと約5分で出納ステーションに運ばれます。



# 伝えたい、つなげていきたい想い。 福岡大学派遣隊、被災地へ再び。

今年も8月20日～24日、福岡大学派遣隊が宮城県気仙沼市と南三陸町でボランティア活動を実施しました。全学部の学生約300人から応募があり、その代表として学生102人と教職員10人が参加。がれき撤去や日干しれんが作りなどの作業、そして高齢者の方々や子どもたちとの交流などを行いました。

## ■ボランティア活動地区

	体力班	高齢者班	子ども班
8/20(月)		南三陸町	
8/21(火)	南三陸町	気仙沼市	気仙沼市
8/22(水)	南三陸町	気仙沼市	気仙沼市
8/23(木)	南三陸町・気仙沼市	気仙沼市	気仙沼市

## 伝えること、決して忘れないこと こそが復興につながる



「第2次 福岡大学派遣隊」  
学生代表  
法学部法律学科  
4年次生  
本村 麻菜美さん

深い傷を負われた被災者は、震災について口を閉ざされるのではないかと思っていました。しかし、多くの方が自ら被災体験を話される姿に接し、「伝えたい」という思いを強く感じました。

昨年の派遣隊が知り合った宮司さんのご家族は「福岡から多くの人が来て、祈ってくれる。その思いがこの地を浄化しているのです」とおっしゃいました。南三陸町の町長さんは、「復興した町をぜひ見に来てください」と話してくださいました。現地で私たちができるることは限られています。しかし、現地を訪ね、伝えること、決して忘れないことが復興につながるのだと思いました。

今回は、全体リーダーとして102人を動かす大変さを実感しました。現地では、常に先読みして行動しないと邪魔にならかねません。リーダーとして組織を動かす力、そのための考える力を身に付けることができましたし、一人一人が何をかを感じ取って自信を持ったと思います。私たちに力をくれた町をぜひ再訪して、復興した姿をこの目で確かめたいと思います。

## 体力班



医学部生としてやるべきことをあらためて問い合わせました

被災地のPTSDについてニュースなどで聞いていたこともあり、「心のケア」のプログラムに強くひかれて参加しました。

高齢者班の一員として、仮設住宅でお茶会を開き、ハンドマッサージなどを行いました。被災地に住む方の中には家族を亡くし、家を失って、深い傷を抱えていらっしゃる方もいるのに、とても生き生きとなっていました。「ボランティアに来ている人が現地の人々に励まされる」とよく耳にしますが、本当にその通り。逆に「九州の豪雨、大変だったでしょう」と気遣ってくださり、返す言葉はありませんでした。

医学を学ぶという恵まれた環境にいる私は、将来、自分の専門技術によって傷ついた人の役に立つことができます。そのためにも、今はしっかりと勉強して専門性を確立させなければと、あらためて強く思いました。

意識の高い仲間と巡り合えたことも大きな財産です。みんなで協力して役割分担しながらリーダーを支え、やり遂げた経験は、将来、チームで医療に従事する上でも、きっと役立つと信しています。

## 仲間たちの存在が広い世界へと踏み出させてくれた

学童保育のお手伝いをさせていただいたのですが、がれきの片付けのように成果が目に見えるものではありません。校長先生は「昔さんの想いが、子どもたちの中にしっかりと息づいていくのです」と話されました。しかし、すぐそこまで津波が襲ってきたという事実をなかなか受け止めることができず、「自分たちに何ができるのだろう」と悩みました。

そういう中で、隊員たちととことん話しみみました。突っ込んで話してみると、それぞれがとても深い考えを持っていて、圧倒されるほどでした。さらに、活動を通じて、みんなが日に日に変わっていく。これは貴重な体験でした。

進路に悩んでいた私自身も、派遣隊を通じて「もう少し薬学を完めてみよう」とあらためて決心がつきました。さらに自分で磨き、知識を深めるため、大学院に進みます。派遣隊の経験と仲間たちの存在が、私を一歩前へ、広い世界へと踏み出させてくれたのかもしれません。このつながりを一生、大切にしていきたいと思っています。

## 被災地での活動



### 救命講習

万一事態に備え、心肺蘇生法を学ぶ



### 野外活動

炎天下での活動を想定し、野外での清掃活動を実施

## 活動報告会

### 結団式

隊員が一堂に会し、あらためて結束を固める



### 募金活動

大学キャンパス内で被災地への寄付を募る



### 事前研修(6回)

グループワークを中心に、被災地での活動について、何ができるか話し合う





東日本災害ボランティア  
「第2次 福岡大学派遣隊」隊長  
理学部学生部委員  
山口 武夫教授

頼もしさを感じた学生たちのパワー  
伝え、広げることが復興の力になる

今回、第2次派遣隊として学生102人、教職員10人の総勢112人で活動をしましたが、100人を超える学生の皆さんが同じ目的を持ち、学部や学年の壁を越えて力を合わせた時のパワーは素晴らしいものがありました。事前研修、そして現地での活動を通して変化・成長していく姿を見ながら、頼もしさと同時に無限の可能性も感じました。

今年は猛暑の炎天下での作業に加え、高齢者の方々や子どもたちを対象にした交流活動も行い、多くの方と触れ合い、話を聞く機会がありました。その中で感じたこと、得たものも大きかったと思います。いつ起こるか分からぬ自然災害に備える心構えも含め、これからはこの体験を周りの人々に伝え、広げていくことが大切です。皆が少しづつでもできることを続けていくこと、その積み重ねが復興への大きな力となるのではないかとうなづけます。



「第1次 福岡大学派遣隊」参加  
法学部法律学科3年次生  
土橋 亮太さん

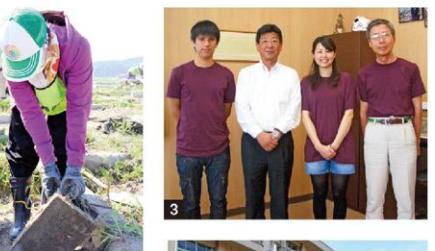
風化させてはいけない、  
伝えていく活動を続けたい

昨年、派遣隊に参加したことは、とても大きな財産になりました。リーダーとして学んだことも多く、目配り気配りができるようになり、より積極的に自分の意見が言えるようになりました。経験したことが少しでも役に立たらしく、今年は事前研修会に参加しアドバイザーとしてかかわりました。派遣隊の皆さんとの今後に期待しています。

私自身、「伝えていくことが義務だ」という気持ちとは今も変わません。むしろ風化させてはいけないという思いが強くなり、機会があることに伝える活動を続けています。今年の3月11日、福岡市役所前広場で開かれたイベントでは、去年参加した隊員が東北の食材を使った芋煮を振る舞い、活動や支援をアピールしました。復興にはまだ時間がかかりますし、支援は一度は終わるではありません。これからもつなげていくこと、そして語り継いでいくことが使命だと思っています。



小さな積み重ねが大きな力になる。  
この経験がきっと成長の糧となる。



## ◆被災地からのお便り◆

昨年に続き訪れた南三陸町の上山八幡宮では、震災体験を元にした補宜の工藤真弓さん作の紙芝居を見せていただきました。また、派遣隊にお手紙もいただきました。

先日は遠い福岡から大勢で南三陸町にお越し下さいましてほんとうにありがとうございました。列をなして参道を進み、お宮で拝む皆さんは、綺麗な気を纏っていました。(〇〇名以上の皆さん)気が漏ついて、それは「悪いはひとつ」といふことを物語つするようでした。天災は表しうと同時に多くの気づきを私たちに与えましたが、そこから立ち上がる事が出来たのも、皆さんのように応援して下さる方々の存在を常に感じていたからです。涙して下さる方がいたからです。深い祈りによって、私たちは今日まで救われ生きています。私の家は神社を生業としていますが、この震災で「折り」というものの本質を皆さんから教えて頂きました。成し遂げようとするそのことに、祈りが含まれているか、どこまで祈りを持って向かっているかによって、物事はゆるやかに変わゆります。祈りがそこにあるからこそ、叶うことあるのだ、この一年半、熱度も実感しました。皆さんは欲求を叶える力なども違います。皆さんは南三陸をはじめ、被災した土地の上で流して下さった、汗や涙のような無欲の想いにこそ、永遠の力は宿るのだと思います。

皆さんの尊い命の鼓舞は、今南三陸町の蘇る力となって、確かに深く響き渡っています。上山八幡宮(宮司)工藤祐允「福井」真弓



派遣隊をあたたかく迎えてくださいました  
上山八幡宮(宮司)工藤祐允



自作の紙芝居「ぼくのふるさと」で  
想いを語る補宜の工藤真弓さん





# 講義ライブ90分

福岡大学には、総合大学の特長を生かした幅広い分野の共通教育科目があります。

その中の「総合系列科目」に今年度から新たに、大学生として

学習・研究を行う上で必要なスキルを身に付ける授業が加わりました。

今回は、その「アカデミックスキルズゼミⅠ・Ⅱ」を紹介します。

## 大学生に必要な学問的技法、基本的能力を身に付ける。

### 学部学科を越えたクラス編成 専門分野の異なる4人の先生が それぞれ3回ずつ授業を担当

1年次生を対象に、今年度から新たに開講した「アカデミックスキルズゼミⅠ・Ⅱ」は、大学で学問を修めていく上で必要な基本的能力を習得することを目的とした授業です。人文学部・経済学部・理学部・工学部といった専門分野の異なる4人の先生が授業を担当し、学生は学

部学科・文系・理系の枠を越えて共に学習することができます。  
前期の「アカデミックスキルズゼミⅠ」では、大学生として身に付けておくべき基礎的な学問的技法の中でも「読む力・書く力・話す力」の習得が目標です。合同ガイダンス後、学生たちは四つのグループに分かれ、4人の先生による個別の授業をそれぞれ3回ずつ受けていきます。少人数のゼミ形式で行われるため、自ら考え、調べ、発言し、仲間と議論するなど積極的に参加する姿勢が求められます。経済学・量子力学や情報工学など今までなじみのなかつたテーマもありで、発言が増えていったそうです。

この日は、前期の集大成となる合同ゼミ。「原発の賛否」をテーマに、パワーポイントを使つたグループ発表が行われました。「難しいテーマですが、鋭い質問に対してもしっかりと答えていました。

てもっと詳しく知りたい」「廃炉と存続コストはどうやらが得なのか」となど活発な質疑応答が交わされました。

次のグループは東日本大震災後の日本の現状を踏まえ「存続反対」の立場。火力発電を併用しながらの再生可能エネルギーへの移行と、分散型エネルギーシステムを導入すれば原発は不要であるという意見です。鋭い質問に対してもしっかりと答えていました。

統いてのグループは日本のエネルギー自給率の低さから、海外依存を改善するためにも「原発は必要だ」という立場です。そのメリットと必要性だけでなく「デメリット」にも触れ、3-11の教訓から人材育成と安全対策にコストをかけることも提案しました。質疑応答では「その財源はどうするのか」「原発のコストを新エネルギーへシフトしていく」と提案しました。

短い期間でしっかり準備しそれぞれの立場で理論を組み立てたこと、発表も姿勢や質問への対応もまた積極的に質問する様子に4人の先生も満足げな表情。講評でも各グループとも独



### さまざまな分野の視点で 学習し視野を広げていく



最初のグループは「原発は存続すべきだ」という立場から、原子力発電のメリットや廃止した場合のデメリットについて、コスト、発電効率や環境問題などの問題点に触れ、その対策も含めて結論を出しました。発表後は「対策についての質問が飛び出し、それを答える間口先生は話します。

## 学生の声

苦手な話す力が身に付いたことで、  
積極性が出てきました。



履修科目の中でも上位を争う面白さ。  
進んで学ぶことが楽しくなりました。

経済学部経済学科1年次生 久野 裕司さん

「読む・書く・話す」という基本のスキル、特に苦手な話を身に付けていくと思いつきました。発表のために少人数グループで一つのテーマを掘り下げていく中で、仲間と話すこともレッスンになりました。またコミュニケーション能力も付いたと思います。それが自信になり、ほかの授業でも積極性が出てきました。後期はもっと論理的に、説得力のある話しができるようになったらと思います。

### Our teaching style

(前列左から) 関口 浩吉 人文学部 文化学科 教授  
中村 由依 経済学部 経済学科 准教授(前期のみ)  
田崎 茂 理学部 物理科学科 教授  
(後列左から) 高瀬 光夫 経済学部 経済学科 教授(後期のみ)  
鶴田 直之 工学部 電子情報工学科 教授



この授業は、大学で勉強していくために必要な基本的能力、アカデミックスキルズを1年次生の間にしっかりと付けてもらうことが狙いです。学生も教員も文系と理系の混合ですから、専門分野による視点や発想の違いを知る機会になるでしょう。授業では、分かったつもりになるのではなく、どんなことでも積極的に質問してください。それも大学で学んでいく上で必要なスキルの一つです。



共通教育科目 総合系列科目「アカデミックスキルズゼミⅠ・Ⅱ」



# 福岡における形成外科の先駆者 アンチエイジング美容医療もリード

形成外科診療部長

**大慈弥 裕之 教授（医学部）**



口唇口蓋裂の術前・術後。



最初の患者と手術はこの石膏像。高校2年の時、壊れた鼻を形成した。



手術の結果が患者さんの  
生活の質だけでなく、  
人生を左右することもある。



形成外科と皮膚科で美容医療カンファレンスを毎月行い、症例を共有する。



チーム医療を進める先生。時には他大学病院の医師らと連携も。

## 形成外科は生活の質、 人生の質にかかるる医療

形成外科は正式に標榜科として認められてまだ40年に満たないという、比較的新しい診療科です。混同されやすい整形外科や美容外科との大きな違いは、機能を含めた体形を整えることを主な目的とした医療であること。「非常に幅が広く、例えば子どもの先天異常や外傷、病気の治療後の変形などが対象になります」と大慈弥先生。患者さんは乳児から高齢者までと幅広く、福岡大学病院の場合、そのうち3割以上が小児です。

この日の手術は片耳に先天異常を持つ10歳の患者さん。肋骨から取り出した軟骨を移植して耳を再建するというもの。もう片方の耳と形を合わせながら細かい手術は、外科医としての技術はもちろん、いかに自然に美しく形作るかというセンスも問われます。「形成外科はQOL(生活の質)を改善する科といわれていますが、子どもの場合は人生の質にかかわります。その子の一生を左右することになるので、非常に重い先生。体の形は二の次と思われるがちですが、命を救うことと変わらない責任の重さがあるのです。

## ハードな卒後研修、 数多くの症例経験が自信に

福岡大学病院の形成外科の歴史を築いてきた大慈弥先生は、本学医学部の3期生。入学当初から、既存の医学部にない新しいこと

その後、福岡市内の大学病院に形成外科がなかったこともあり、母校に戻ってきましたが、当初は整形外科の診療班としてのスタートでした。実績を積み重ねて1996年には診療科として独立。福岡大学病院に初めて形成外科が誕生したのです。形成外科を持つ大学病院はまだ少なく、本院には全国から研修医が集まっています。

大慈弥先生の研究の柱の一つは小児形成外科です。「口唇・口蓋裂や耳の変形、漏斗（ろうと）胸など外表先天異常を持つ子どもたちの形成は福岡でも取り組みたかったです。福岡市立こども病院には形成外科がなく、そのため福岡市立こども病院には形成外科がなかったので、そこにもソチを頼つて診療に行くようになりました」。

二つ目は「乳がん術後の乳房再建術」。昔の乳がん治療は皮膚から乳腺、その下の筋肉やリンパ腺もすべてを取り除いてしまったので、そこにもソチを頼つて診療に行くようになりました。90年代になると乳房再建法が導入され、主流になると乳房温存療法が導入されました。しかし手術しないとできません。92年に博愛会病院から協力依頼があり、自家組織移植による乳房再建術を始めました。今後はインプラント（人工乳房）を使った乳房再建術を設立し、第一回目の設立記念総会を来年、福岡大学の主催で開きます。今後、根

治性と整容性が両立する乳がん治療が、全般的に広まってゆくものと考えます」。

## 体の内外から高齢者を元気にする アンチエイジングの美容を

そして三つの目が、世界的にも関心の高い「抗加齢美容医学」。これは高齢者を元気にするための美容医療を目指すもので、健全な美容医療を広めることが目的です。「分かりやすい例が老人性眼瞼下垂症です。日本の高齢者特有の顔貌は、まぶたが下がる眼瞼下垂からています。しかもこれは頭痛や肩こりの原因になることが多い。それを治療すると見た目も若々しくなり、元気になります。加えてシミやシワの改善などアンチエイジングの美容、さらには食事や運動によって体の中からきれいに健康にしていくことも目標です」と先生。その一環として、昨年病院新館に開設した美容医療センターは皮膚科と合同で総合的な美容医療を行なう全国初の施設として注目を集めています。

医局の枠を超えた交流と幅広い臨床トレーニングが経験できるところだから、現在全国から有能なスタッフとレジデンツが福岡大学病院に集まっています。形成外科美容専門医の育成に力を入れている先生は「目の前の患者さん、目の前の勉強から逃げない、たくましい医師を育てるこそ私の使命」と話します。後輩たちへは「勉強が大変なのほどの大学も同じ。卒業しても一生勉強は続くのだから前向きに努力してほしい。語学、読書や芸術などの教養も必要ですし、スポーツや旅行、悩んだり友達と遊ぶことも勉強の一つです。ただ、あくまでも本分を忘れないこと」というアドバイスを送ってくださいました。



を目指したいと思っていたそうです。「美術が得意で、絵を描いたり、ものを作ったりするのが好きだったので、何か関係する医療はないだろうかという気持ちもありました。當時は命を救うことさえできれば、傷跡などはあまり大きな問題ではないという時代でも、も訝然としない思いがあつたんですね。5学年の夏休みに見学に行った東京の警察病院に形成外科があり、全国から患者さんが集まつて手術を受けました。体を作る医療のレジデンット制度に近いプログラムを導入していた北里大学病院の形成外科に入局も体力的にハードな上、レジデンツ間での競争も激しい環境の中で、合理的で効率的な研修ができ、目からうろこが落ちる経験も数多くしました。それが自信につながつたと振り返ります。また、神奈川県立こども医療センターに出向し、多くの外表先天異常の症例を経験したことで、小児形成外科に力を入れたいと思うようになつたそです。

あこがれて、ひた  
その先に、新

温かさと厳しさ。生徒を見守る目は教室でも  
グラウンドでも変わらない。

立てなかつた夢舞台に、  
いつか指導者として

「高校野球の指導者になりたいという気持ちは、ずっと心の片隅にありました」。

福岡県八女市にある西日本短期大学附属高等学校。社会科教諭として母校の教壇に立ちながら、野球部の監督も務める西村慎太郎さん。教師という道を選んだきっかけを尋ねると、高校3年の夏、福岡県大会の決勝で敗れて逃した『甲子園』だったと言います。あと二歩のところで叶わなかつた夢の舞台に、いつか指導者として立つてみたい。確たるもの目標というよりも漠然と抱いたその想いが、今に続く始まりでした。

野球部を引退後、大学進学を目指し受験勉強を始めた西村さん。しかし、朝から夜中まで、それこそ寝る時間以外は野球ばかりしていましたから、正直なところ自信はないかったのです。スポーツ推薦で体育学部（現スポーツ科学部）を受験する道を選ばず、自分の力を試してみよう、失敗したら予備校に通つて勉強し直そうと覚悟を決めて挑んだ福岡大学の入試結果は「山が動きました」と笑います。

現役で福岡大学経済学部に入学。しかし、所属していた準硬式野球部の活動とアルバイトには熱心でしたが、勉強への意欲がわからず、悩んだ時期もあったと言います。「落ちこぼれの学生でした。それでも先生や職員の方が見捨てず、相手をしてくださったし、力も貸してくださいました。卒業までに5年かかりましたが、お世話になつた皆さんのおかげで、今の自分があると感謝しています」。

むきに追いかけた  
しい夢がある。

今約以上の進度

西日本短期大学附属高等学校 社会科教諭・野球部監督

西村 慎太郎さん  
経済学部産業経済学科 1995年卒業  
専門学校

馨  
隈重信

生徒に考えるきっかけを与えるため、授業では  
ものの見方や考え方を語りかけること。





西村監督の指導は、技術面より野球に取り組む姿勢や心構えを重視する。

他者を認める目を持つようになりました」と当時を振り返る西村さん。演劇部には主役だけではなく脇役も、照明や音声を担当する部員もあります。そのうち誰か一人でも欠けたまゝ、あるいはタイミングを外したら舞台が切り立たず、駄目になってしまいまます。スポットライトを浴びる人間だけではない、裏方で支える存在の大切さに気付いた部員たちは、レギュラーと控え選手の間に温度差があつた野球部の現状を憂い、何とかしようと考へ始めました。

また、舞台に立つためにセリフを覚え言葉の意味を知るようになった彼らは、演劇部の先輩に勧められ本を読むようになつたそうです。教教室や遠征バスの中で、野球部から始まつた読書ブーム。それはクラスにそして学年全体に広がつ

ていきました。「今まで部活しかしていないような子が、静かに読書をしていました」など、少しずつ変わっていったのが、生徒たちにも影響を与え、思いがけない効果をもたらしたのです。「子どもたちを成長高めてくれたら」と試みた演劇部との交流。そこで起こった変化が、ほかの生徒たちにも影響を与え、思いがけない効果をもたらしたのです。「子どもたちを成長させるのは大人ではなく、同世代の子どもたちだと思います。親や教員にできることは限られていて感じました」と西村さんは、大切なのは生徒を認める目を広げ持ち、見逃さずして上げるこどもの子にも居場所をつくつてあげること、「あとは少しずつ高いハードルを与えて続けることくらいです」。

## 夢はここで終わらないと 甲子園が教えてくれた

同時に、生徒たちが互いに影響し合い、成長していく姿を見ながら自身も違う世界に触ることで、広い視野や他人を認めることの大切性を感じました。「大学時代、さまざまな人に出会い、多くの体験をしてきたつもりでしたが、まだまだなど。自分の未熟さにも気が付きました。今では野球とは関係のない人たどりう機会や、新しいつながりも増え、私自身も世界が広がりました」。

## 多様な人と出会える福大 教員を目指すには最適な場所

今も続く演劇部との交流が始まった甲子園出場を果たします。選手として実現できなかつた夢を、指導者として叶えたのです。結果は初戦敗退でしたが、教育者の一人に「どうやったか」と感想を聞いたところ、返ってきた言葉に甲子園のすごさを感じたと言います。

「最高の場所でした。夢だと思つていた

夢はここで終わらないと  
甲子園が教えてくれた

うでした。が失敗から得るもの、学ぶことは大きいです。だから傷ついたら、頑張り、苦しみだしては分ります。それが財産になります。自信になると思つたのも言います。『大学時代、さまざまな人に出会い、多くの体験をしてきたつもりでしたが、まだまだなど。自分の技術やレベルをうんぬんする前にもつ大事なことがあるのではないか』。何が足りないのか、何が必要なのかと考えた野球以外の知識や経験を身に付けてやらないといけないのではないかと思ったのです」。

行き詰まりを感じていたその頃、高校決意どおり2年間で資格を取り、晴れましたから」。その言葉とは「いいんじゃないのか。君のような落ちこぼれの教師がいてもいいと思う」。

ボント背中を押された西村さんは、母校の学生寮で寮監のアルバイトをしながら、最短の2年間で教員免許を取ることを決意します。朝、寮生たちを送り出した後は、聴講生として福岡大学へ通う日々。授業が終わって高校に戻ると夕方からは野球部のコーチの仕事、夜は寮監として生徒たちの世話をあります。また福岡都市高速が通つていない時代でしたから、バスから通うのは大変でした。ただ、2年で取ると決めた以上、O.B.として、コーチとして、生徒たちに格好悪い姿は見せられません。彼らがいたから頼被されました」。

西村さん、立派な教員免許を取つた西村さんですが、最初は教員免許を取つたときも、強し、教員免許を取れば正式に採用してもらえるという条件だったのです。ゼミでお世話になつていた大石透夫先生に相談しました。どう思つてくれた言葉は今も忘れられません。それだけで頑張ろうと思つ



1 野球部監督としての西村さんは、教室の表情はどうて変わり。その迫力に圧倒される。2 全日本大会に共に出場した仲間とは今も交流がある。3 「できない理由より、できる理由を考える方が楽しいですし、一つの夢を叶えたことで、今は何でもできると思えます」と語る西村さん。

て母校の社会科教諭となつた西村さんはその後、野球部の監督にも就任します。高校野球の指導者になりたいという夢が実現したのです。しかし、就任2年目の夏には早くも壁にぶつかつてしましました。

夏の甲子園大会で全国優勝してから約10年、チームは県大会で敗退し続けています。どんなに良い選手がいても、どれだけ野球に打ち込んでいても、それだけでは限界があります。一発勝負に弱く、このままでは限界があります。そこで力を出せず、結果を残せないことも多かつたそうです。野球の技術やレベルをうんぬんする前にもつ大事なことがあるのではないか』。何が足りないのか、何が必要なのかと考えた野球以外の知識や経験を身に付けてやらないといけないのではないかと思ったのです」。

行き詰まりを感じていたその頃、高校

時代から尊敬していた国語の教師で、演劇部の顧問でもあった竹島由美子先生からは、何かが変わったきっかけになるかもしれません。野球部の男子部員がいないから、野球部の生徒に演劇をさせてみたらどうだろう、という話がありました。演劇部の練習指導の厳しさを知つていて西村さんは、何が変わったのかになっているかもしれません。野球部員の中の4人は突然、グラウンドではなく演劇部に立ち、芝居をすることになり戸惑いを見せますが、変化を期待して演劇部に託してみることにしたのです。

た。だらう、という話がありました。演劇部の練習指導の厳しさを知つていて西村さんは、何が変わったのかになっているかもしれません。野球部員の中の4人は突然、グラウンドではなく演劇部に立ち、芝居をすることになり戸惑いを見せますが、変化を期待して演劇部に託してみることにしたのです。

時代から尊敬していた国語の教師で、演劇部の顧問でもあった竹島由美子先生からは、何かが変わったきっかけになるかもしれません。野球部の男子部員がいないから、野球部の生徒に演劇をさせてみたらどうだろう、という話がありました。演劇部の練習指導の厳しさを知つていて西村さんは、何が変わったのかになっているかもしれません。野球部員の中の4人は突然、グラウンドではなく演劇部に立ち、芝居をすることになり戸惑いを見せますが、変化を期待して演劇部に託してみることにしたのです。

た。だらう、という話がありました。演劇部の練習指導の厳しさを知つていて西村さんは、何が変わったのかになっているかもしれません。野球部員の中の4人は突然、グラウンドではなく演劇部に立ち、芝居をすることになり戸惑いを見せますが、変化を期待して演劇部に託してみることにしたのです。

時代から尊敬していた国語の教師で、演劇部の顧問でもあった竹島由美子先生からは、何かが変わったきっかけになるかもしれません。野球部の男子部員がいないから、野球部の生徒に演劇をさせてみたらどうだろう、という話がありました。演劇部の練習指導の厳しさを知つていて西村さんは、何が変わったのかになっているかもしれません。野球部員の中の4人は突然、グラウンドではなく演劇部に立ち、芝居をすることになり戸惑いを見せますが、変化を期待して演劇部に託してみることにしたのです。

た。だらう、という話がありました。演劇部の練習指導の厳しさを知つていて西村さんは、何が変わったのかになっているかもしれません。野球部員の中の4人は突然、グラウンドではなく演劇部に立ち、芝居をすることになり戸惑いを見せますが、変化を期待して演劇部に託してみることにしたのです。

た。だらう、という話がありました。演劇部の練習指導の厳しさを知つていて西村さんは、何が変わったのかになっているかもしれません。野球部員の中の4人は突然、グラウンドではなく演劇部に立ち、芝居をすることになり戸惑いを見せますが、変化を期待して演劇部に託してみることにしたのです。



小さな不安、揺らぐ思い、ふと立ち止まる心。  
誰にでもありそうなキャンパスライフの戸惑いを  
前向きに考えるための、心のサプリメントをお届けします。

## 自分を「きわめる」ための 四つの方法

マイナス部分より、まずは  
自分の持ち味に気付こう

あなたは「変わら、成長する」という言葉、「自分のマイナス部分を克服し、プラスに変えること」あるいは「自分にないものを身に付けることが変化や成長だと考へているかもしれません。しかし、それだけが変わること、成長することではありません。マイナス部分を見るのではなく、もともと「プラスだった部分をさらに伸ばしていく、自分らしい持ち味に気付くこと、も、変化や成長のための一つの方法です。」

そう話をすると「長所や特技といえるほどもののは思いつかない」「自分は人と比べて、飛び抜けたところがないから」と人もいるでしょう。例えば就職活動に際しては、バランスの良さや平均点であることより、飛び抜けたもの、得意なこと、自分らしさなど、アピールできる「何か」を求められることがあります。それが見つからず不安になつたり、自分はダメだと落ち込んでしまつたりすることもあるかもしれません。ところが、実は自分で気が付いていないだけであなたの中にもその「何か」はあるのです。

### 失敗を恐れず、主体性を持つ行動しよう

わつていくきっかけになるはずです。そしてそれは、自分らしさを「きわめる」ことにもつながつていくでしょう。

**失敗を恐れず、主体性を持つ行動しよう**

気付きと同時に、「もう一つ大切なことがあります。それは、自分の人生は自分の意志で選んできているんだ」という「主体性」を持つことです。ただ与えられたことをやる、誰かに言われたらやるのではなく、たとえ失敗しても、効率が悪くても、試行錯誤しながら、自ら主体的に行動することに意味があるのです。

自分で選んで行動することは、大変なこともあります。自分が、楽しさや喜びがあります。結果はどうであれ、自信になり、新たな挑戦への原動力にもなるでしょう。何も特別なことをする必要はありません。日常のささやかなことや毎日のありふれた行動であつても、自分自身がどう考へ、どう感じ、どう行動しているのかが重要なのです。その小さな積み重ねが将来につながり、あなたを形づくり、変化や成長のきっかけとなっていくのです。

### 頑張った自分を認め、褒めてあげよう

楽しい、うれしいと思えることが一つでも見つかれば、毎日が生き生きとしたものになります。きっとほかのことも頑張ることができます。最後に、あなたが主体性を持つ行動し、何かを頑張ったときには、それを認めてあげてください。

### 自分らしさを「きわめる」ためのヒント

- すべて優れている必要はない、多少の凸凹があってもいいと考えよう。
- 人と比べない、周りの評価を気にし過ぎない。
- 好きなもの、興味があること、ちょっとわくわくできることを見つけよう。
- 生き生きと打ち込める趣味や楽しみを持とう。
- 好きなことに熱中できる時間を意識的につくろう。
- 具体的にイメージできる、少し先の楽しみを見つけよう。
- 自分の考え方や行動に主体性を持つ。
- 友達の持ち味に気付くことは、自分自身に気付くきっかけにもなる。
- 小さなことでも頑張った自分を認めて、褒めてあげよう。
- 何でも安心して話ができる人を持つ。

あなたの中の宝物を輝かせるために、少しづつでも実践してみてください。

来てみて  
話して  
こころの整理

### ヒューマンディベロップメントセンター (HDセンター: 学生相談室) のご案内

ヒューマンディベロップメントセンターでは、カウンセラーが皆さんからの相談を受け付けています。例えば…何となくだるくてやる気がおきない、授業などに行くのがおっく、よく眠れない、または眠り過ぎる、友達の会話についていけない、何の話をしているのか分からぬ、人間関係がうまくいかない、キャンパスの居心地が悪い、勉強がなかなかうまくいかないなど、毎日さまざまな相談に学生さんが訪れます。

生活の中でうまいいかなくて困っていて、どうにかしたいと思っている方は、一人で悩まずに、一度HDセンターに来てみませんか？ どんな相談でも大丈夫です。相談内容の秘密は守りますので、安心して相談してください。

相談時間 月・水・金 / 9:30~16:00 火・木 / 9:30~18:40

場所 学生事務室棟3階(1階に学生課のある建物)

○本学学生のことであれば、ご家族・教職員の皆さまからのご相談もお受けしています。

予約・お問い合わせ 092-871-6631(代)(内線2630)

※お電話は平日の16時30分までにお願いします。

ウェブサイト (<http://www.adm.tku.ac.jp/fu816/home1/hd1.htm>) もご覧ください。

相談などは  
無料・予約制  
です。

### グループのお知らせ

後期授業期間、以下のグループを実施しています。「HDセンターに興味があるけれど、まだ行ったことがない」という皆さん、この機会に一度見に来てみませんか?どの学年の人でも参加できますので、関心がある方はお気軽にお問い合わせください。

#### ●ランチタイムをご一緒に

おしゃべりやゲームをして、ランチタイムを楽しく過ごしてみませんか?  
毎週木曜日 12:00~13:00(ランチグループ)  
毎週木曜日 12:00~13:00(サポートグループ)  
担当カウンセラー:屋宮

#### ●社会で役立つ対人関係スキルグループ

コミュニケーションや対人関係を改善したい方におすすめします。  
毎週木曜日 16:20~17:20 / 担当カウンセラー:屋宮

初めて参加される方は、事前にお問い合わせください。

### [監修]

人文学部教育・臨床心理学科 そもそも「心の成長」って何でしょう。私は前より少し  
だけ生き方が楽になることが成長かなと思います。  
本山 智敬 講師  
皆さんはどう考えますか。

### [協力]

本学ヒューマンディベロップメントセンター  
インター兼カウンセラー・臨床心理士  
妹尾 奈津子さん  
インター兼カウンセラー・臨床心理士  
白木 裕美子さん

「いつもの友人などは違う人間関係を経験することも、自分に気付くきっかけになります。また、信頼できる誰かと話すことも問題解決には必要です。心の動きがどれくなったら、いつでも話しに来てください」

●妹尾さん・白木さんお薦めの本

### 『君のためにできるコト』 菊田まりこ 著

大切な人に何かを伝えること。大切なことは、実はとっても身近にあつたりするといろんな人や出来事を思い浮かべながら読んでみませんか。  
(左:妹尾さん、右:白木さん)





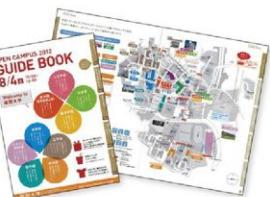
- 1 猛暑日にもかかわらず、朝早くから参加者が続々と来校。
- 2 就職・進路支援センターで、就職や卒業後の進路について質問する参加者。
- 3 希望者に配付された過去の入試問題集を受け取る高校生たち。
- 4 受付開始を30分繰り上げてスタート。ガイドブックを手に、目的の場所に移動。
- 5 医学部看護学科では、実習機器を使ったさまざまな看護技術体験を実施。
- 6 館内を回るクイズラリーを企画し、予想を上回る来館者でにぎわった新しい中央図書館。
- 7 工学部建築学科の建築模型を見ながら在学生スタッフの説明に聞き入る参加者。
- 8 文系センター棟2階「アーバン」では、英語のネーティブ教員による体験授業も。
- 9 新しい中央図書館への関心も高く、館内を熱心に見て回る高校生の姿。
- 10 スポーツ科学部で人気だったトレーナー体験。在学生スタッフが優しく指導していました。
- 11 理学部地球圏科学科の実験機器展示に興味津々の参加者たち。
- 12 硬式野球部の練習を見つめる高校生。当日はクラブの活動風景も公開されました。
- 13 医学部医学科の学生の丁寧な指導を受け、シミュレーション機器の体験に挑戦。
- 14 高校の授業とは違った雰囲気を体験できた商学部の模擬講義の様子。

経済学部 経済学科4年次生  
亀田 直也さん工芸学部 建築学科4年次生  
友池 美耶子さん医学部 看護学科2年次生  
西村 美帆子さん工学部 化学システム工学科教授  
重松 幹二先生入試企画広報課  
中尾 由樹子さん

8月4日(土)、「オープンキャンパス2012」を開催しました。当日は午前中から気温が上昇し猛暑日となりましたが、朝早くから続々と参加者が集まり、受付開始を早めるなどの大盛況。おそろいのTシャツ姿の教職員と在学生スタッフが1,270人の参加者を迎えました。今回、模擬講義や公開実験、施設見学など並ん

で人気が高かったのが、教職員や在学生による個別相談です。特に在学生スタッフに対する受験勉強からカリキュラム内容、大学生活のことまで具体的な質問をする参加者の姿が多く見られました。教職員や先輩の生の声を聞き、本学の魅力を体感した参加者の皆さんと、来春再会できることを楽しみにしています。

ドリンクチケット付き  
ガイドブックを片手に  
学内めぐり



## ようこそ、オープンキャンパスへ。

### アンケートを実施しました

高校生の皆さんを対象にアンケートを行い、延べ100人以上から回答が寄せられました。さて、その結果は…。



広々としたキャンパスや先輩たちの元気な笑顔もあって、福岡大学のイメージは「大らかで明るい雰囲気」が1位に。



大学生活では「新たな仲間との出会い」や「サークル活動」への期待が高いという結果に。











# Archive

歳月の頁を開けて

PAGE3 知のある風景



知の森林はそこにあった。  
若者たちは好奇心の赴くままに  
書物を探し、文字を追い、  
知を貪欲に渉獵していた。

知の広場はそこにあった。

若者たちは向上心の赴くままに  
仲間と交流し、師を慕い、  
知を純粹に研磨していた。

知識を得、考察を深めていく。  
主張し、耳を傾ける中で  
自分を見つめ、きわめていく。  
時代と共にスタイルは変わっても  
その良き学風と伝統は変わらない。

知の聖域は、いつもここにある。